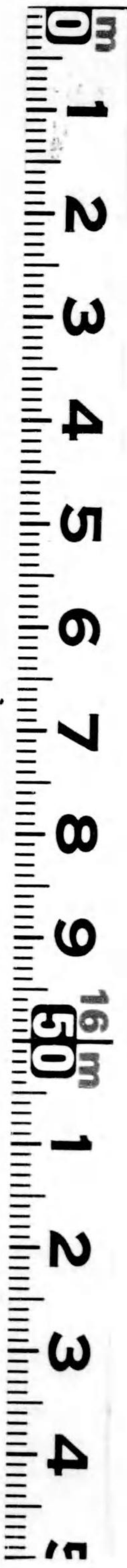




特 100

518

~~4/1/20~~



始



持100

518

Vertical text or markings on the right page, possibly bleed-through or a stamp.

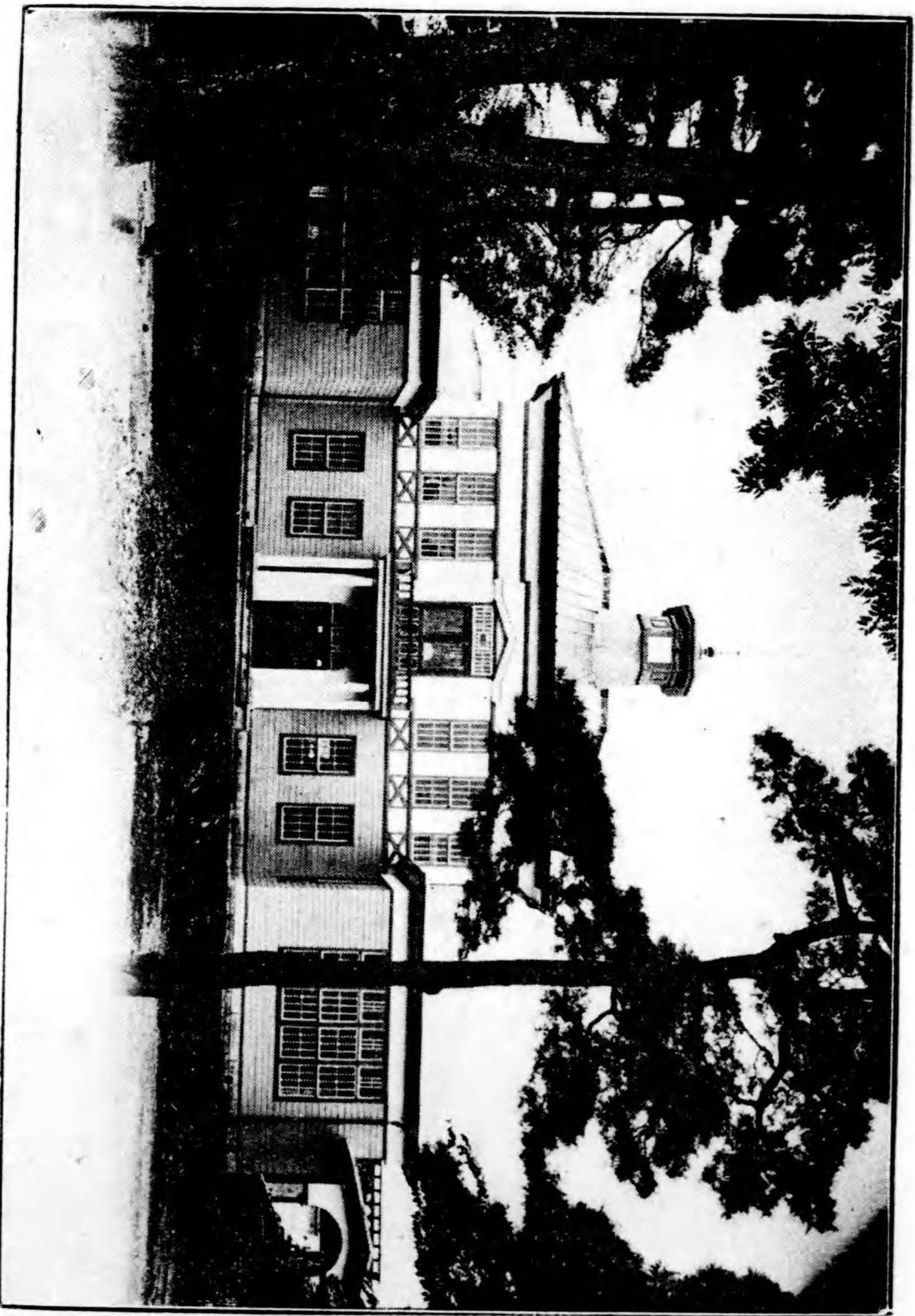
218
19100

西
子成仲秋
灌

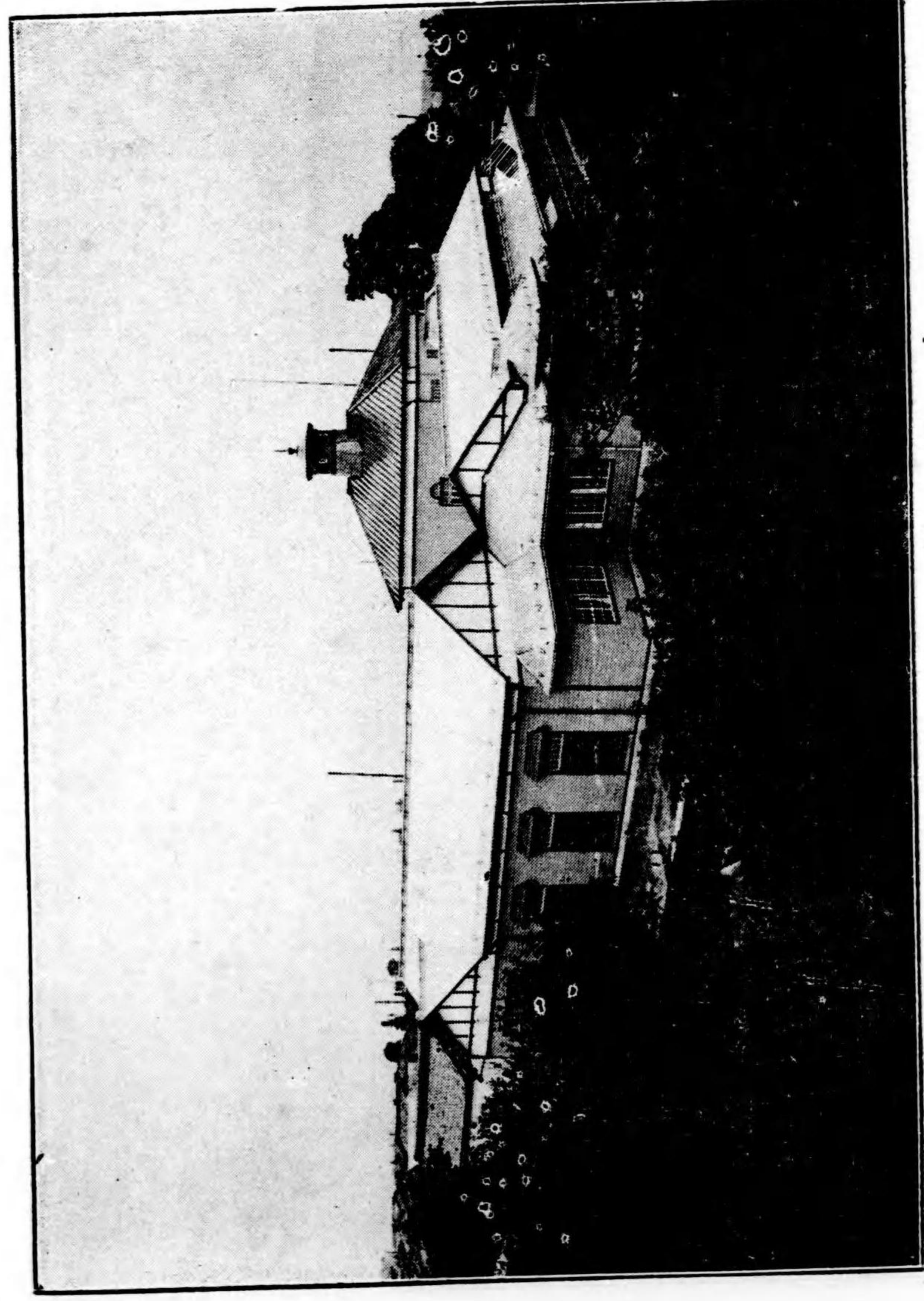
依是德繼

印

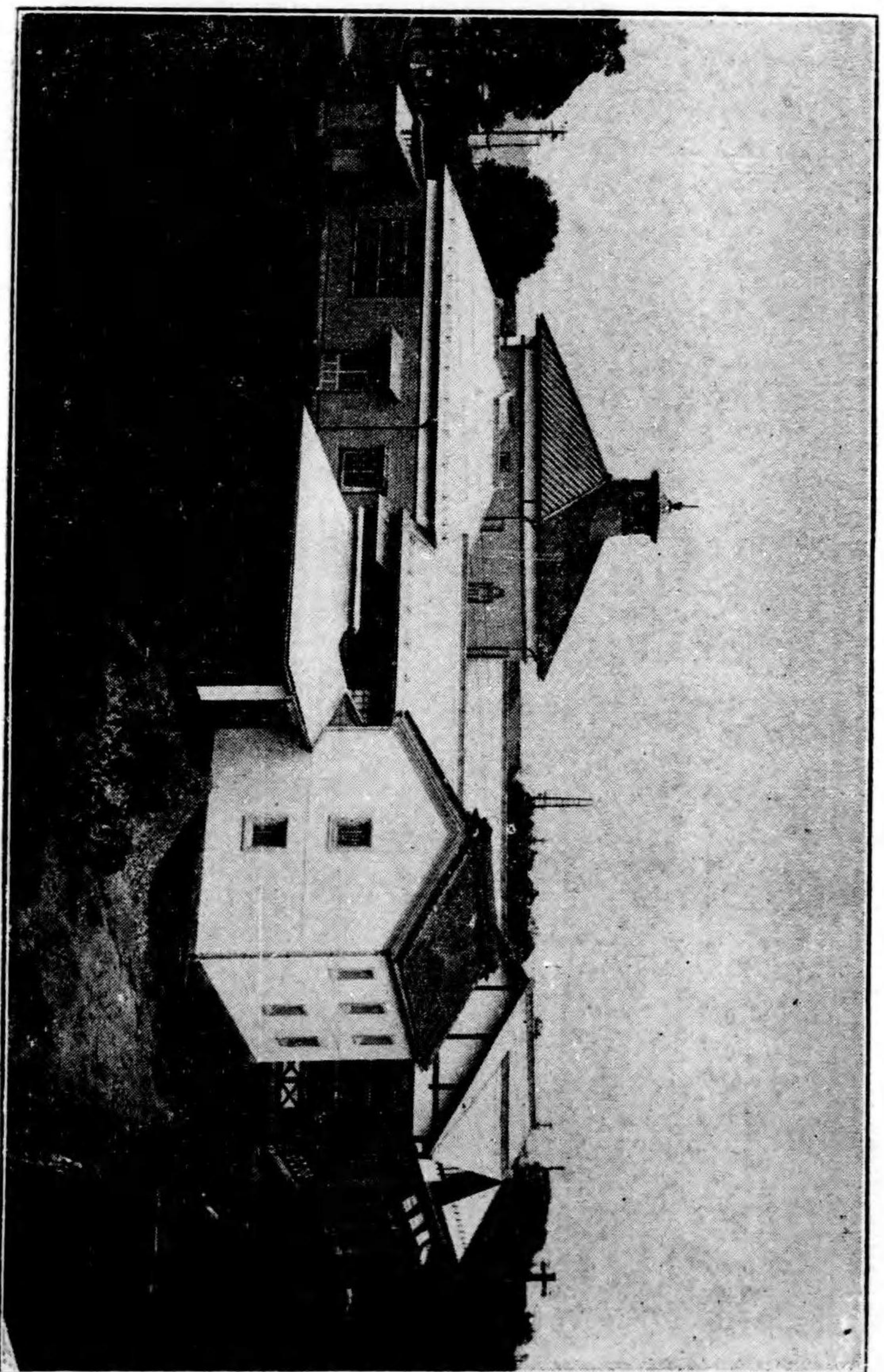
書ノ下閣助東田平爵伯臣大内



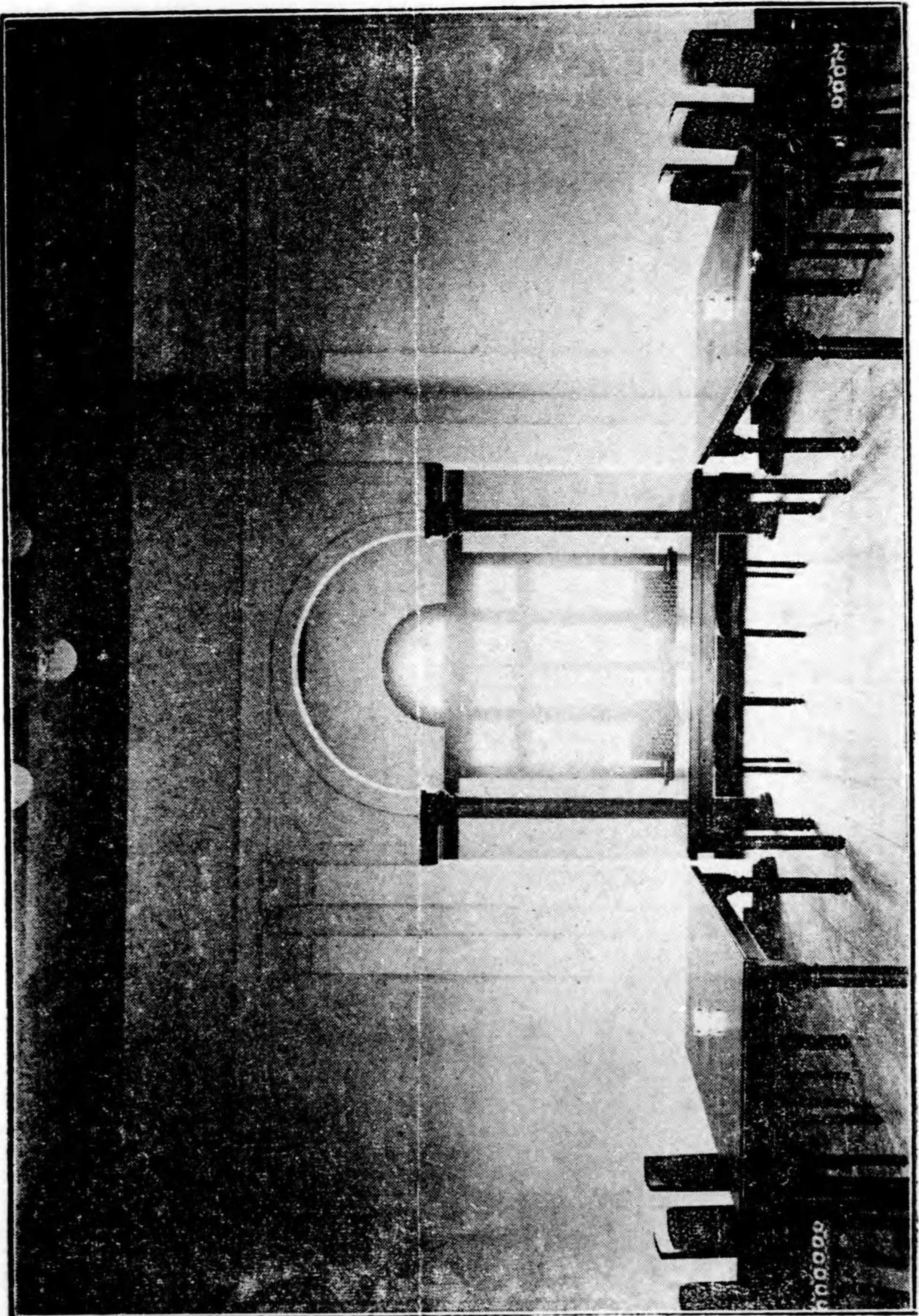
赤穂村役場正面



赤穂村役場側面



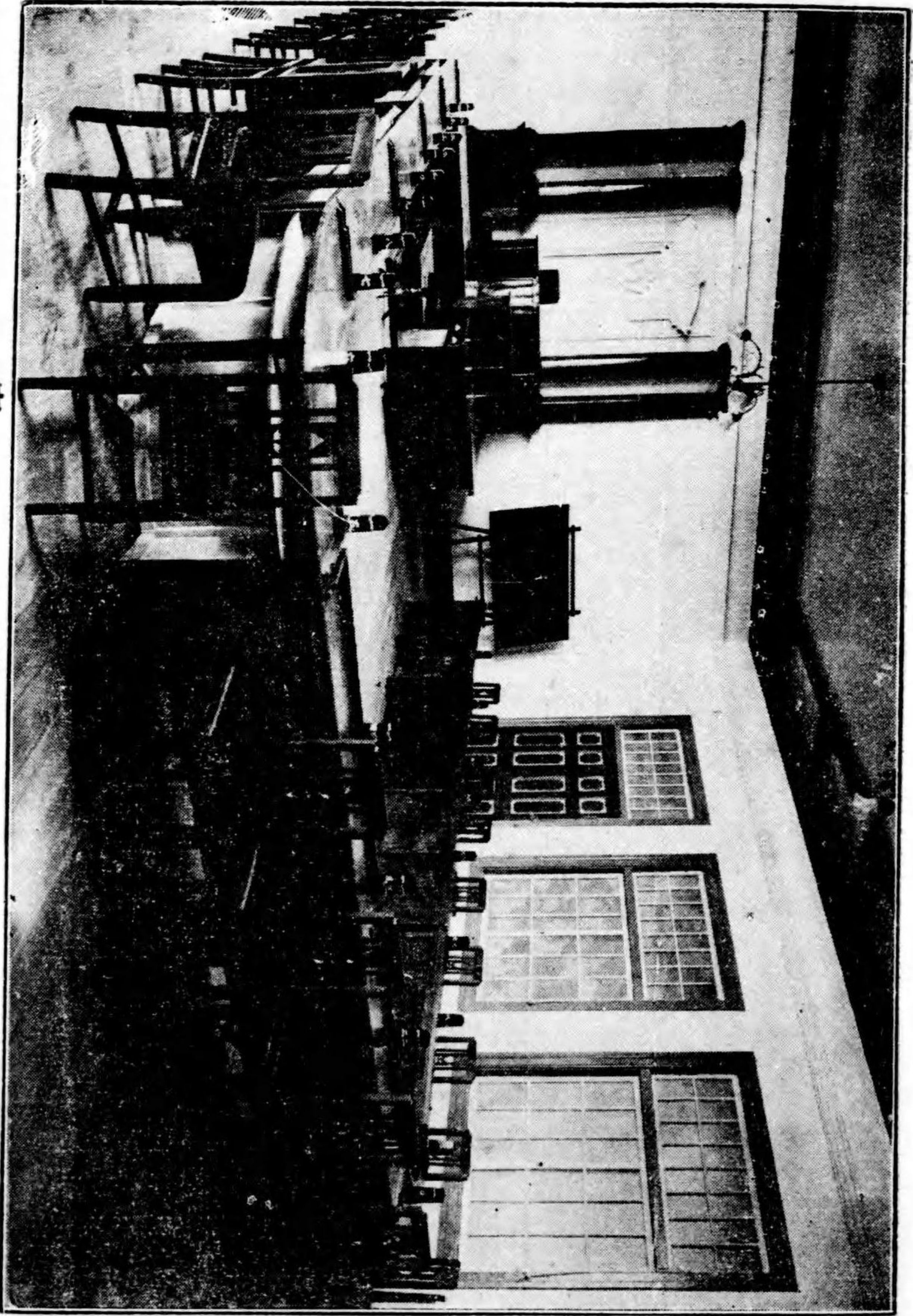
東 德 村 役 場 側 面

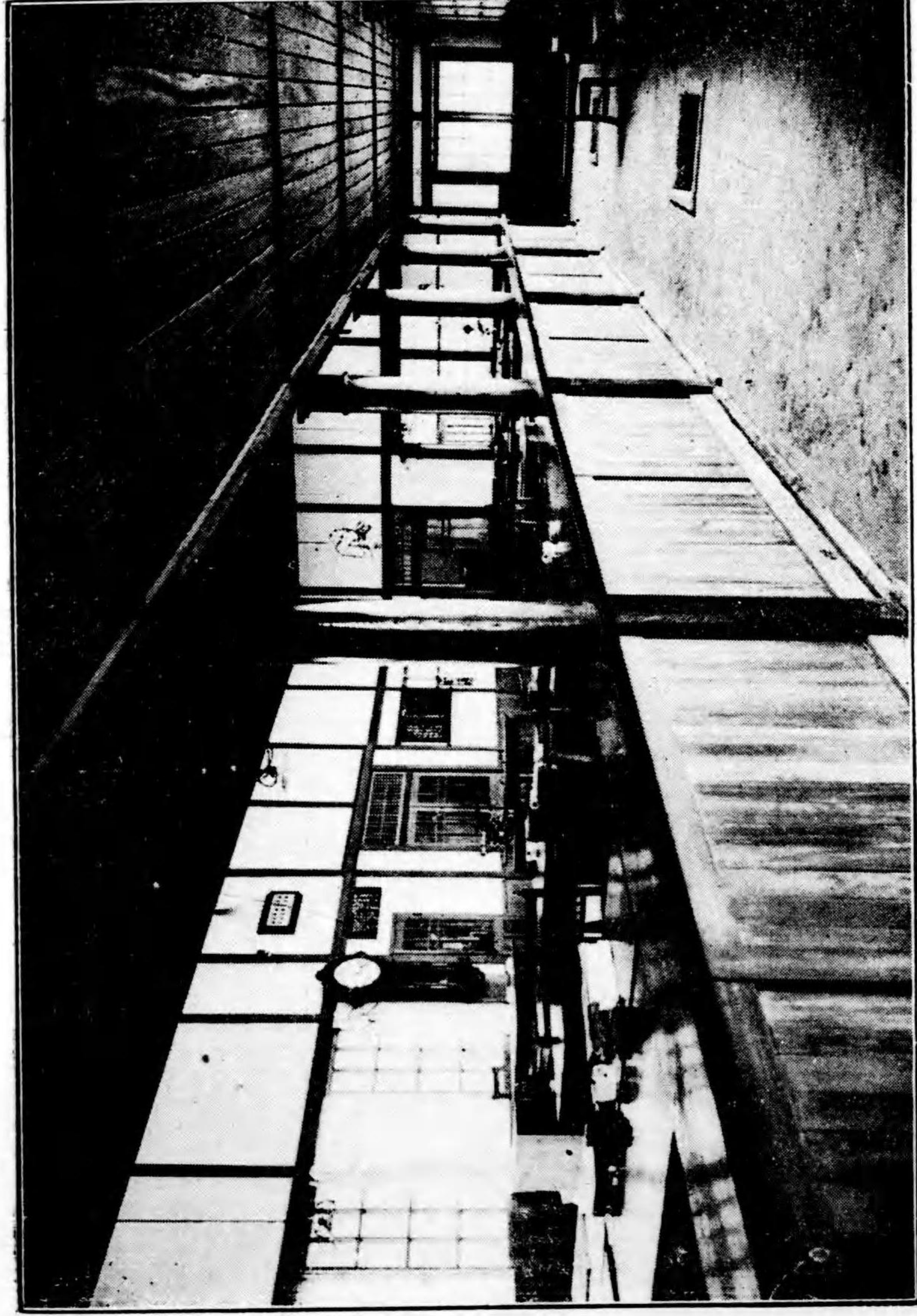


正

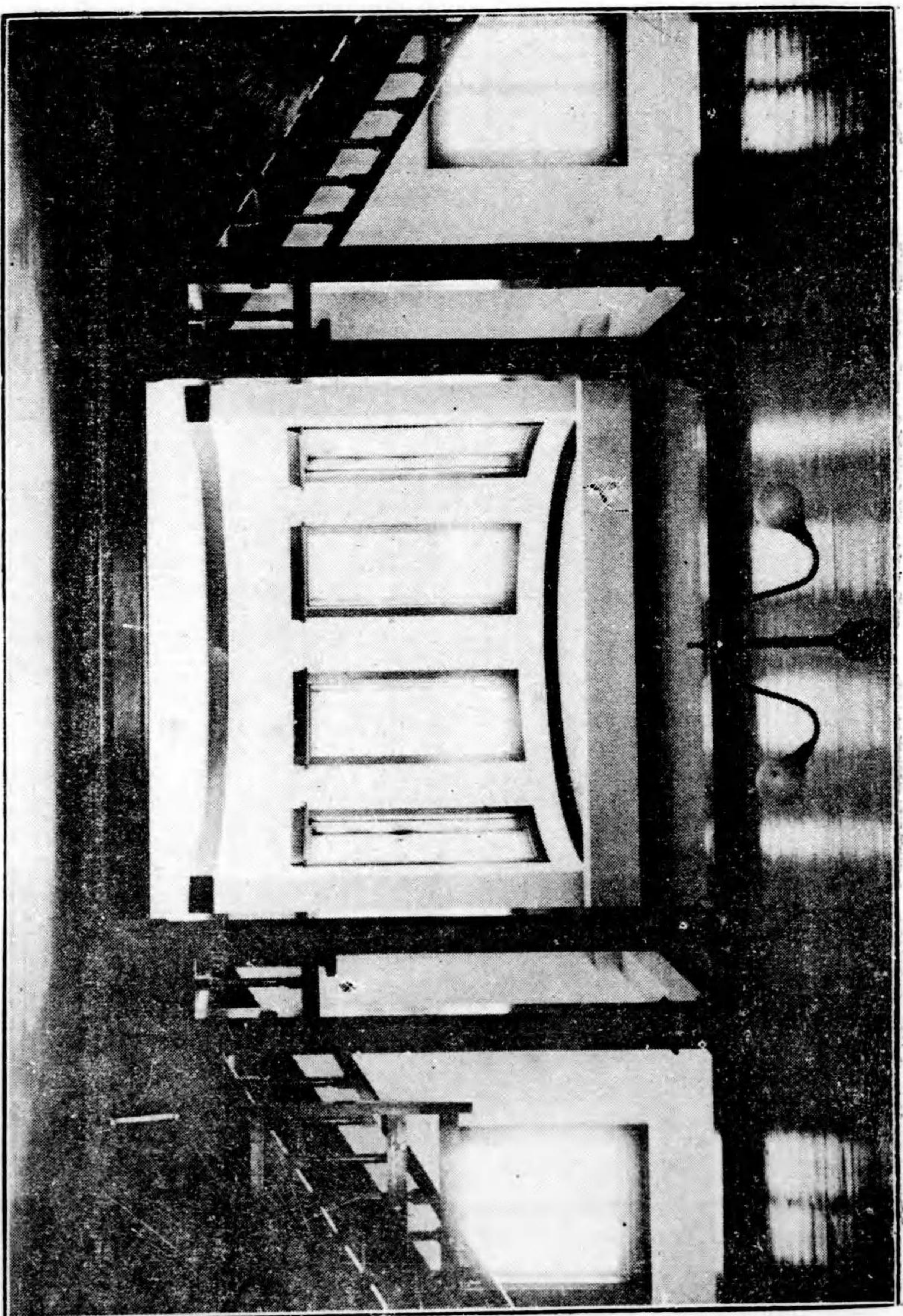
廳

會 議 室

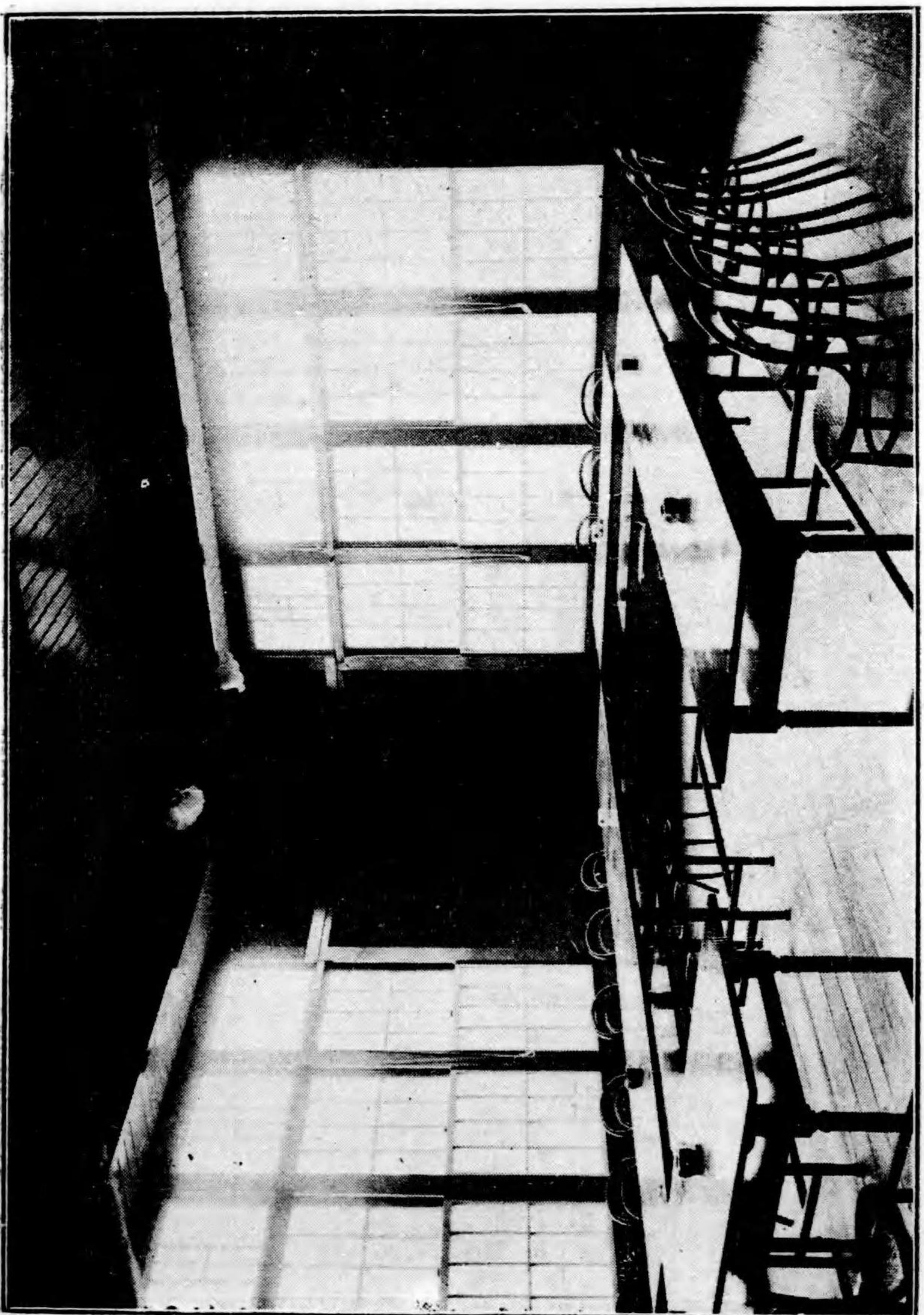




室務事



階上リ踊リ場

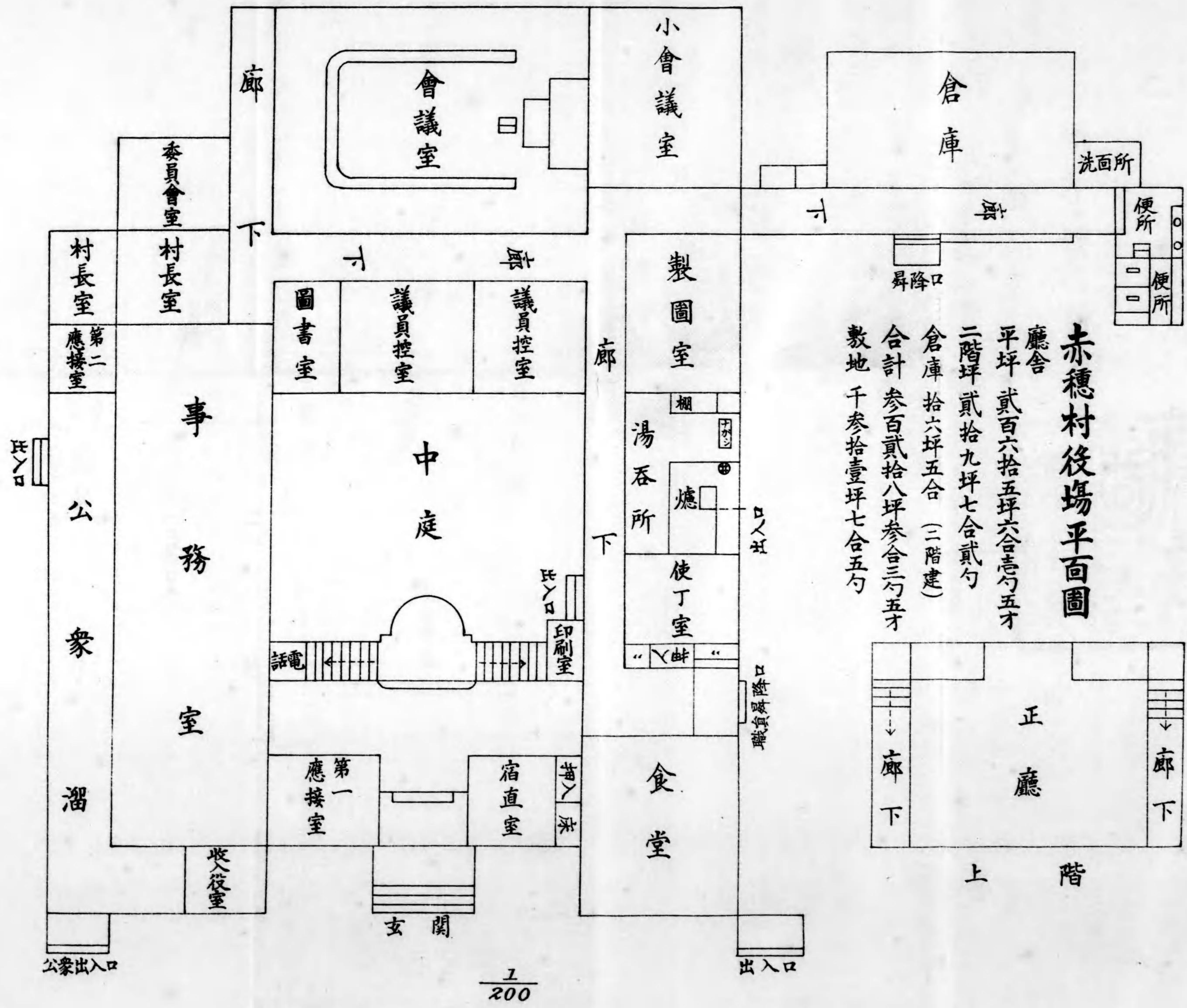


食

堂



本館附設女子合五七
 東京女子大学
 東京女子大学



赤穂村役場平面圖
 廳舍
 平坪 貳百六拾五坪六合壹勺五才
 二階坪 貳拾九坪七合貳勺
 倉庫 拾六坪五合 (二階建)
 合計 參百貳拾八坪參合三勺五才
 敷地 千參拾壹坪七合五勺

1/200



赤穂村勢の概観
 赤穂村勢の概観
 赤穂村勢の概観



赤穂村勢の概観

本村役場廳舎改築工事竣工を告げ茲に落成式を舉ぐるに當り、念の爲め我赤穂村勢の概観を叙述してお知らせいたします。小冊子のことでありますから極めて簡單なる記述に過ぎぬのかもしれませんが皆是れ先輩識者の苦心焦慮の跡に外ならぬことを諷と
 與に共に感謝したいと思います

11. 12. 2
 内交

赤穂村長 福澤泰江

○ 赤穂村勢の概観

○町村制施行前の赤穂村

本村往古のこと之を詳にせされとも元伊那郡春近庄に屬し往還現今の縣
道三州より西を上穂村と云ひ東を赤須村と稱す字福岡辻往還西上穂
街道村は慶長八年大正十一年を距るより幕府に隸屬し千村平右衛門預りた
共赤須村に屬すり次て元和四年大正十一年を距る耕地高の内九百十三石五斗八升九合近
藤織部の知行所となり慶安元年大正十一年を距る耕地切開高三十石光
前寺領となり殘高六十石一斗は舊に依りて幕府に隸し千村平右衛門
預所たること故の如し又赤須村は慶長六年より元和二年迄十六年
間大正十一年を距る小笠原兵部太夫領地となり同三年より寛文十一年大正十一年を距る

年一迄五十五年間は脇坂淡路守領地となり寛文十二年より慶應三年
迄百九十六年間幕府に隸し松本藩預所たり而して赤須村の内光前
寺領三十石あり上穂村に於ける寺領と共に明治二年に又近藤知行所
は明治三年に上知となり何れも伊那縣伊那縣廳は飯島にありの管轄に屬し維新
政府の治下に一統せられ明治五年舊來の名主庄屋の制度廢止せられ
代るに區長戸長を以てし地方制度を根底より改廢せらるゝに方りて
兩村は筑摩縣下第三百三十八區と稱され筑摩縣飯田出張所の管轄とな
る明治七年始めて戸籍帳を編製し上穂村より赤須村、赤須町、北下平
南下平、上赤須、市場割、小町屋に至る順を遂ふて戸番を附せりこ
れ明治四年布告戸籍法の規定によるなり

明治七年一月第三百三十八區を筑摩縣第十八大區三小區と改稱せられ
此年上穂村赤須村の兩村を合して赤穂村と稱す然れども村名は只地
名の改稱に過ぎず行政區名は大區小區と稱し村吏の官命に依りて進
退せること依然舊の如く同八年の後半に至る迄村内の村々（現今の
部落）に戸長副戸長を存す

明治八年以降明治十一年に至る迄四ヶ年間は舊によりて第十八大區
三小區と稱す此間明治九年八月筑摩縣廳の焼失により廢縣のことあ
り當小區は此時を以て長野縣所管に移れり
明治十一年從來の大區小區の制に改正あり古の郡村制度に復舊して
郡區町村編成法の發布となり信濃國上伊那郡赤穂村と稱され太政官

達及明治十二年本縣乙第百二號達に依りて公選せられたる議員を以
て村會を開かる

明治十二年郡區町村の組織新に改まりて村の豫算等亦夫々村會の議
決を経るを要し村吏も亦公選に依りて就任せられたり本村自治政治
の首途に於て自治行政裁理の名譽を有したる人々左の如し

戸長 中坪 三九郎

村會議員

- | | | | |
|-------|--------|-------|--------|
| 小町谷虎作 | 北村茂市 | 下村與藏 | 横山七郎 |
| 小町谷次郎 | 下村治郎兵衛 | 横山一郎 | 氣賀澤龍次郎 |
| 原久三郎 | 北村勘兵衛 | 福澤銀次郎 | 赤須治郎三郎 |

小町谷 勘一郎	米山傳三郎	小出彦三郎	小平利右衛門
福澤善右衛門	小出彦左衛門	池上駒四郎	村澤四郎右衛門
北原八三郎	小平友一郎	澁谷新次	小出傳三郎
小町谷 榮三郎	原 傳左衛門	宮澤源一郎	小原八重八
原 義孝	宮澤徳平	芦部喜一郎	中城善三郎
横山源吾	北澤一郎	壺澤太一郎	大沼嘉藏
後藤源三郎	池上伊兵衛		

明治十三年第十八號公布に因り村内人民總代協議の上村會規則を編製し長野縣令の認可を受けたり
 選舉は全村を分ちて十組となし議員の數を廿六人となし其組合限り選舉を行ふことに定めらる

上穂南割	二人	北下平	三人
上穂中割	二人	南下平	二人
上穂北割	四人	上赤須	二人
上穂町	三人	市場割	二人
赤須町	三人	小町屋	三人

右に依りて當選せる人々左の如し

明治十三年當選せる村會議員

小町谷虎作	村澤吟八	村澤四郎右衛門	横山一郎
宮澤源一郎	村澤寅松	北村勘兵衛	芦部喜一郎
福澤善左衛門	小平利右衛門	北原八三郎	米山傳三郎

池上駒四郎	小出彦左衛門	氣賀澤 龍次郎	小町谷 榮三郎
小出 金七	小平友一郎	原 久三郎	小原八重八
下村治郎兵衛	盛澤太一郎	原 傳左衛門	大沼嘉藏
原 喜兵衛	横山源吾		

明治十四年中平三九郎戸長職を退任し小町谷勘一郎後任に選ばれ就職したりしが當時府縣會町村會の狀態理事者と圓滑を欠ける所尠なからず公選の戸長を以てしては町村の事務を整理し能はざるに至りしかば遂に再び戸長は官選に依りて任命せらるゝに至り明治十五年十月福澤丑太郎本村戸長に任命せられたり此年下平部落分れて下平村と爲り赤穂村と其治政を別にするに至り堀内九左衛門官命を受け

て下平村戸長たり

分村當時の村會議員は左の如し

明治十五年赤穂村會議員

小町谷虎作	米山庄三郎	北村勘兵衛	福澤銀次郎
北村茂市	澁谷新治	池上駒四郎	大沼嘉藏
鹽澤太一郎	横山源吾	宮澤織太郎	堀内五郎
村澤吟八	北澤準吉		

明治十五年下平村々會議員

堀内與次右衛門	原 久三郎	松崎善左衛門	下村治郎兵衛
北原八三郎	松崎善右衛門	小出彦右衛門	下村與藏
小出 金七	中原峰三郎	松崎平次郎	松崎政治

中原平四郎 小出品右衛門 戸枝三吉郎 小出傳三郎

明治十五年分村以降明治十八年に至る迄兩村各村政を別にせしか小町村の分立を許さざる施政の方針に基き明治十八年二月兩村聯合役場を組織し其治務を共にしたり當時の理事者及村會議員左の如し

赤穂村 下平村 戸長 福澤丑太郎

明治十八年五月選舉

赤穂下平二ヶ村聯合村會議員 定員六名

赤穂村

小町谷 虎作 横山 源吾

下平村

原久三郎 小出彦右衛門

北原八三郎 下村與藏

補欠

明治十九年改選

赤穂村下平村聯合村會議員

明治二十年死亡 小町谷 虎作 村澤四郎 右衛門 横山 源吾

原 久 三 郎

下 村 興 藏

堀 内 九 左 衛 門

補 缺

福 澤 岩 夫

赤穂村下平村分立治政の間三ヶ年にして明治十八年二月兩村聯合役場を組織し又四ヶ年間に於て合併して赤穂村と爲る實に明治二十二年五月二十二日にして町村制實施の時なりとす由來本村は天龍川中田切川太田切川に依て東南北を劃り西は駒ヶ岳山脈によりて西筑摩郡と隔たる而して古來貨物の集散市場を共にし産業の状態相等しく風俗習慣亦同じ宗教は佛寺五を筭すと雖概ね天台淨土の二宗を信奉

し上穂赤須の兩村は東西に分れたりと雖部落有山野の關係は之を南北に縦斷し村内血族相交り隣保の交誼亦親密にして一自治團體としての資質を具有すること如此ものあり町村制々定の理由書を一讀して躊躇なく兩村を合併して舊に復せること豈偶然ならんや

○町村制施行後の赤穂村

地方自治制度は端を明治十一年一月時の内務卿大久保公が地方の体制改正意見を大政官に提出せるに生まれり爾來數次の變改を経て明治二十一年四月十七日を以て市制及町村制を發布せらる本村は即ち明治二十二年四月十八日を以て新制に依りて村會議員選舉を行ひ五月一日村會を召集し村長及助役を選舉し五月二十二日行政區劃を定

めて區長及區長代理者を選擧し此日新役場を開廳す

明治七年故大久保卿臺灣事件の爲め支那に使其時通州に次し左の詩作がある公が
地方制度に就て意見を定められて居られたことは己に明治七年の昔であるとは皇后
宮大夫大森男爵のお話でありました

國家氣運恢興時 志業十年終不違
從是隣交期永遠 更將内治護皇基

○村會議員

明治二十二年四月十八日選舉

- 福澤 岩夫
- 下村 與藏
- 福澤 丑太郎
- 池上 駒四郎
- 鹽澤 太一郎

- 小平 友一郎
- 北村 勘兵衛
- 村澤 寅松
- 横山 七郎
- 横山 源吾
- 原田 松三郎
- 小町谷 樵太郎
- 秦 庫太郎
- 北村 茂市
- 氣賀澤 龍次郎
- 小町谷 仲吉
- 北原 八三郎
- 横山 一郎

明治二十五年四月十八日半數改選

小出常三郎
 小出道三郎
 原久三郎
 北原久次郎
 村澤金三郎
 北村茂市
 宇田安太郎
 原山松三郎
 春日定次郎
 北村平左衛門
 北村勘兵衛

明治三十年四月辭任

辭任
補缺

(郵便局長ノ爲)

明治廿八年四月十八日半數改選

明治三十二年六月辭任

同三十一年十二月辭任

同三十一年八月辭任

同三十一年三月辭任

補缺

明治三十一年四月半數改選

同三十一年九月辭任

同三十一年八月辭任

小町谷樵太郎
 池上駒四郎
 福澤三郎
 宮澤織太郎
 鹽澤太一郎
 小平友一郎
 村澤寅松
 尾形熊太郎
 福澤丑太郎
 竹村類太郎
 北原久次郎
 北村平左衛門

同三十二年一月辭任

同三十一年九月辭任

同三十一年九月辭任

同三十二年二月辭任

補 缺

同三十二年三月辭任

明治三十二年四月補缺選舉

同三十二年五月辭任

原	北	小	福	堀	村	原	池	小	福	春	橫
原	原	町	澤	內	澤	松	上	出	澤	日	山
角	久	谷	泰	政	金	三	彌	道	丑	定	一
太	次	仲	江	之	三	郎	吉	三	太	次	郎
郎	郎	吉		助	郎			郎	郎	郎	郎

同三十三年四月辭任

明治三十四年四月選舉

同三十四年四月辭任

同三十八年十月辭任

補 缺

宮	宮	宮	宮	宮	宮	宮	宮	宮	宮	宮	宮
澤	澤	澤	澤	澤	澤	澤	澤	澤	澤	澤	澤
博	博	博	博	博	博	博	博	博	博	博	博
之	之	之	之	之	之	之	之	之	之	之	之
輔	輔	輔	輔	輔	輔	輔	輔	輔	輔	輔	輔

同四十年二月辭任
明治三十七年四月選舉

同三十七年九月有給村長就職ニ付辭任
同四十三年三月辭任

明治四十年四月選舉

大沼嘉藏
北村平左衛門
村澤丹次郎
春日定次郎
竹村類太郎
福澤丑太郎
原山龜松
村澤力藏
小町谷仲吉
小町谷誠一郎
下村芳父

補 缺

補 缺
同四十年七月辭任

明治四十三年四月選舉

宮澤織太郎
芦部喜一郎
北原金彌
福澤岩夫
宮澤習太郎
福澤三郎
笹古重太郎
春日伊助
小町谷武雄
小出常三郎
小出道三郎
生田大助

齊藤長吉
 村澤治助
 春日繁治郎
 大沼嘉藏
 横山吉太郎
 村澤力藏
 原角太郎
 小町谷仲吉
 福澤泰江
 小町谷誠一郎
 赤須政次郎
 小町谷六郎

大正二年四月町村制ノ改正ニヨリ總選舉

明治三十七年四月選舉
 明治四十三年四月選舉
 明治四十年十月選舉

大正三年七月辭職

同

大正四年四月死亡

大正六年六月辭職

大正八年十二月辭職

大正六年四月選舉

生田大助
 塩澤晋作
 春日繁治郎
 福澤卓也
 福澤泰江
 原角太郎
 小出道三郎
 北澤半四郎
 小町谷樵太郎
 齊藤長吉
 宮澤織太郎
 芦部喜一郎
 中坪與三郎

大正六年四月選舉

大正八年十二月死亡

大正九年六月死亡

大正四年四月選舉

大正三年四月選舉

福	氣	中	中	小	鹽	福	小	小	中	中	生	中
澤	賀	原	城	谷	木	澤	林	町	城	田	原	原
三	澤	政	源	三	半	谷	太	谷	源	大	政	也
郎	輪	也	藏	勝	織	三	市	六	造	助	也	

大正十一年一月選舉

大正十一年四月選舉

大正十年四月選舉

大正九年十月選舉

中	生	池	北	竹	北	村	原	中	小	中	宮	村
原	田	上	澤	村	澤	澤	角	城	平	川	澤	澤
政	大	萬	半	兼	仲	郁	太	數	一	博	織	織
也	助	藏	四	吉	三	司	郎	郎	雄	賢	太	治

大正九年十月死亡

大正十年四月選舉

大正十一年四月失格

大正十一年一月死亡

生	松	竹	北	村	村	芦	笹	原	原	福	松
田	川	村	澤	澤	澤	部	古	角	川	澤	川
大	長	兼	半	吟	郁	文	重	太	龜	文	長
助	治	吉	四	治	司	藏	郎	郎	松	藏	治

中	松	氣	北	下	小	大	小	小	倉	戶	池	福
島	崎	賀	原	村	町	沼	平	出	田	枝	上	澤
長	榮	澤	金	市	谷	正	幸	正	久	治	伴	憲
一	吉	輪	平	郎	武	勝	太	良	太	三	吾	和
郎	操	平	郎	雄	藏	郎	作	郎	郎	郎	吾	和

○村長助役及收入役

村長

町村制施行當時ヨリ明治廿六年五月迄 名 譽 福 澤 丑 太 郎
 明治廿六年五月ヨリ同三十一年八月迄 同 福 澤 丑 太 郎
 同三十一年八月ヨリ同三十二年五月迄 同 福 澤 丑 太 郎
 同三十二年六月ヨリ八月迄 職務管掌長野縣屬 金 子 金 平
 同三十二年八月ヨリ同三十三年三月迄 名 譽 福 澤 丑 太 郎
 同三十三年五月ヨリ同三十七年五月迄 有 給 海 野 幸 績
 同三十七年八月ヨリ同四十一年二月迄 同 福 澤 丑 太 郎
 同四十一年三月ヨリ大正三年七月迄 名 譽 福 澤 岩 夫
 大正三年九月ヨリ現任 同 福 澤 泰 江

小町谷樵太郎
福澤 勳

助 役

明治廿二年五月十一日認可 辭職 名 譽 北 原 久 次 郎
 同二十二年五月廿九日認可 辭職 同 池 上 駒 四 郎
 同二十二年九月ヨリ同二十三年四月迄 同 北 澤 準 吉
 同二十三年六月ヨリ同三十年九月迄 同 原 傳 左 衛 門
 同二十八年八月ヨリ同三十二年五月迄 有 給 北 原 正 一
 同三十年十二月ヨリ同三十一年九月迄 名 譽 村 澤 寅 松
 同三十一年九月ヨリ同三十二年五月迄 同 原 角 太 郎
 同三十二年八月ヨリ同三十七年四月迄 同 同 原 正 一
 同三十二年八月ヨリ同三十三年一月迄 有 給 北 原 正 一
 同三十三年三月ヨリ同三十三年十月迄 同 岡 野 顯 忠
 同三十四年七月ヨリ同三十八年七月迄 同 岡 野 教 忠
 同三十八年六月ヨリ同四十二年一月迄 名 譽 原 龜 松

同四十二年三月ヨリ大正三年九月迄	同	芦部喜一郎
大正五年三月ヨリ同七年四月迄	同	福澤卓也
大正七年八月ヨリ同九年一月迄	同	下村市郎
大正九年五月ヨリ現任	有給	氣賀澤勝一
収入役		
明治廿二年五月ヨリ同二十四年六月迄		芦部信吉
同廿四年六月ヨリ同二十五年十一月迄		福澤泰江
同二十五年十二月ヨリ同二十六年十一月迄		竹村兼吉
同二十六年十二月ヨリ同二十九年九月迄		氣賀澤輪操
同二十九年九月ヨリ同三十一年六月迄		赤須政次郎
同三十一年六月ヨリ同三十二年一月迄		小町谷誠一郎
同三十二年一月ヨリ同年二月迄	代理	氣賀澤芳太郎
同三十二年三月ヨリ同三十三年五月迄	同	

同三十三年六月ヨリ同三十五年六月迄		福澤玄逸
同三十五年六月ヨリ大正三年六月迄		竹村兼吉
大正三年六月ヨリ同年十一月迄	代理	竹村兼吉
大正三年十二月ヨリ同七年四月迄		小出良作
同七年十二月ヨリ同九年七月迄		原義根
大正九年七月ヨリ現任		池上新七

○役場廳舎建築のこと

本村役場は初め字白銀に在りしが明治二十二年七月八日村會に於て役場廳舎を新築するの件を議決し十月十一日役場位置調査の爲め鹽澤太一郎北村茂市横山七郎小平友一郎を委員に擧げ同月三十日委員の調査報告あり十一月二日位置變更の件を村會に於て決議し其筋の認可を得て工事に着手したのである而して明治二十三年竣工を告げ

たるを以て六月一日其落成式を舉行されたこれ即ち舊廳舎である其建築に要したる經費は金千貳百八拾圓八拾五錢九厘にして左記の財源に依れるものである

一金千二百八拾圓八十五錢九厘

本村費(三階建坪數三十五坪五葺)

(内金五十七圓七十四錢二厘 倉庫修繕費を含む)

内

金百六十九圓 明治二十一年度村費剩餘金

金三百四十四圓八十五錢九厘 明治二十二年度村費剩餘金

金七百六十七圓 協議費(明治二十二年九月二十日同二十三年一月三十日ノ二期ニ徴收セリ)

大正三年十内 譯

大正三年 金百三十二圓六十九錢

大正三年 金五百六十六圓十錢

大正三年 金六十八圓二十三錢

戸數平均割
地價割
營業割

右廳舎は爾來本村自治政務の出づる所として使用されたること實に三十三ヶ年間漸く朽廢し又狹隘にして到底繁劇の政務を辦すべからざるに至れるを以て大正元年改築の議を起し調査委員を擧げ其設計を審議し其財源を攻究し漸く成案を得て大正九年度豫算に於て建築費金五萬圓を決議し同時に臨時建築委員を擧げて工事に着手し年々閱せること三星霜本年十月二十八日全く竣工す其豫算額及年度割は左の通りである

役場廳舎營繕費繼續年期支出方法

大正九年二月二十八日當初決議豫算額は金五萬圓にして二ヶ年の繼續事業なりしが大正十一年七月廿四日更に本案の如く更正決議せり
一、營繕費 金五萬三千六百五十圓 役場營繕費

内

金四萬六千三百六十四圓八十五錢

廳舎建築費

倉庫建築費
敷地々均費
建物移轉其他補償料
設
計
費
雜
費

金三千八百七圓七錢
金七百十九圓四十七錢
金七十五圓
金二千六百六十九圓八十一錢
大金五百十三圓八十錢

此年度割

大正九年度支出額
大正十年度支出額
大正十一年度支出額

金七千四十七圓六十四錢
金二萬五千二圓三十五錢
金二萬一千六百圓一錢

新築廳舎の建坪數及敷地の坪數は左の通りである

一、建 物
三十三 正 廳
水田舎 會議 室

坪數
二二、二二
三五

村長室

收入役室

事務室

委員會室

小會議室

製圖室

圖書室

第一應接室

第二應接室

議員扣室

食堂

宿直室

立關

一〇三八、二五

二、六二五

三四〇、二五

五、三四

一四、七五

八、七五

三、七五

五、三五

一、二五

一、三五

一四、七五

五、八三

六、九四

廊下及階段	六九、三八	(二階共)
電話室	八三	
印刷室	一一、一	
公衆出入口	二、二	
公衆溜	一九、八七	
湯呑所	八、七五	
使丁室	五、八三	
倉庫	三三、一五	(二階共)
便所	四、五	
附屬建坪	一、三四	
計	三二八、三三五	
一、敷地	一〇三二、七五	
實測面積		

役場廳舎の位置 字柳原

東經 百三十七度五十六分二十秒
 北緯 三十五度四十三分四十秒
 海抜 六百七十二米突(二千二百四十尺)

役場建築調査委員

福澤 三郎 小町谷武雄 福澤 泰江 池上駒四郎
 北原久次郎 北澤半四郎 宮澤織太郎
 役場建築委員

小町谷武雄 福澤 三郎 福澤憲和(補欠) 村澤吟治郎
 原角太郎 竹村兼吉

○教育のこと

わが赤穂村の小學教育は明治五年十月映雪學校の創立に始まり爾來上穂小町屋、赤須、下平の小學校が設立され明治十九年に至りてこれを統一して赤穂小學校と稱し明治二十三年現在の位置に校舎を集

合建築し明治二十六年更に増築を企てましたが到底耐久の力があ
りませぬから大英斷を以て明治二十九年に全部の改築を企てました爾
來生徒の増加に伴ひ増築に増築を重ね現在の様なる膨大のものとな
り校舎の敷地一萬二千坪建坪數は教育に要するもの一切では二千百
五十坪を算するのであります

赤穂の小學教育

明治五年十月映雪學校創立に始まる

明治十九年村内五ヶの小學校を合併統一して赤穂小學校と稱し尋
常科を置き明治二十五年高等科を併置す

小學校校舍建築

明治二十三年現在の位置を校地に卜し建築す竣工せるを以て同年
六月一日落成式を舉行された

明治二十六年本校一部増築

明治二十七年寶藏建築

明治二十九年本校改築工事起工三十一年竣工現在の女子部校舎之
なり工費一萬五千餘圓を費す

明治四十一年本校増築工事起工同四十三年竣工現在の男子部校舎
之なり工費金四萬八千餘圓を費せり依りて四十三年十月十六日落
成式を舉行し本村教育史を掲げたる記念帖を出版す蓋し先人の功
徳を頌せる所以なり

大正元年下平分教場の校地を移轉し改築す

大正五年度に於て小學校々地擴張を企て約五千坪を買収し其買収
費金九千餘圓を支出せり

大正六年度に於て女子部増築工事を施工し工費金三千六百餘圓を
支出す

大正七年度男子部増築工事(南教室の増築)を施工し并に土地買入

費を合せて金三千三百餘圓を支出す
 大正八年度に於て校地買収費并に構作物移轉費金千七百餘圓を支
 出し次年度工事の準備を爲せり
 大正九年度男子部教室の増築(北教室の増築)女子部教室の新築并
 に廊下醫務室昇降口器具置場等延坪三百九十九坪外に女子部体操
 場便所宿直室校長住宅等移轉工事又之に伴ふ土工を施工し工費金
 六萬餘圓を支出せり(本年度の工事は若干大正
 十年度に繰延施工せり)

經費

大正十一年度經常費豫算

五三、三二七、〇〇六

生徒數

二一四四人

尋常科

一八八〇人

高等科

二六四人

生徒一人當り經費

二四、八七二

一日ノ經費

一四六、一〇一

生徒一人一日ノ經費

〇六八

御眞影拜戴

明治天皇御眞影 明治二十六年十一月三日

昭憲皇后御眞影 同上

今上陛下御眞影 大正四年十月三十一日

皇后陛下御眞影 大正五年十月三十一日

御眞影は明治二十七年寶藏を建築して此に奉安せしがこの度奉安
 殿改築の議を決し村民諸氏の寄附金六千餘圓の豫算を以て目下工
 事である

校訓

本村小學校にては誠實を校訓とし明治四十一年其細目を制定して
 規範を定めたりしが爾來星移り物變りて其細目にも自然修正を加
 ふるの要あり大正三年十二月七日更に之を改定されたのである

- 一、朋友には信義を以て交るべし
- 二、規律を正しくすべし
- 三、長上を敬ひ禮儀を正しくすべし
- 四、公共物を大切にし公德を重んずべし
- 五、身体を鍛練し進取堅忍以て事に従ふべし

校歌

校歌は大正八年の制定にして同年十月十六日の記念運動會の吉辰にその第一聲が高唱されたのである崇き自然の景趣と遠き昔の歴史とはこの歌詞の如くにやがてわが大赤穂村を建設すべき大教訓を兒童の腦裏に辛刻に印象せらるゝことを信ずる

赤穂小學校々歌

小町谷常是氏作歌
石野 巍氏作曲

- 一、天路を走る駒ヶ峰や、雲間を下る天龍や、其高原に地を占めて。
- 二、小碓の皇子の木の下に、懋ひ給ひし神杉の、神さびませる美女ヶ森、不動の瀧の霧の間に、光り初めけむ光前寺。
- 三、崇き自然を師父として、堅忍不拔の意氣を練り、遠き歴史を偲びつゝ、

向上進取の氣を鍛へ、いよく赤穂の名を揚げむ。

開校記念日 十月十六日

この日盛大なる記念運動會が舉行される又下平分教場にては十一月十六日を分教場設置の記念日と定め毎年運動會が舉行される

教員住宅

明治四十二年小町屋部落に教員住宅を設置し爾來漸次増設を企て現在其棟數十一棟あり建坪數は四百七坪七合九勺なりをとして本校附近にあるものは六棟にして五棟は各部落に散在し社會教育の中心活動たらしめんことを期せるものである

赤穂の青年期教育

本村青年期子女の教育のためには赤穂公民實業學校と赤穂女子實業學校とある何れも中等教育の程度を方針として設立されたるもので男子のためには小學卒業後丁年迄の教育を女子のためには小

學校卒業後十八歳迄の教育を準義務的に勵行して收容教育せんとするが此兩校の目的である

赤穂公民實業學校

本村の補習教育は明治三十五年十一月實業補習學校の設立に始まり同三十六年九月農工補習學校と改稱同四十四年女子部を染織學校に移し復農業補習學校と改稱し大正六年にこれを廢止して同年七月十三日文科大臣より公民實業學校の學則が認可されたものである其後更に其内容を充實する爲め學則を改正し校舎の建築を遂行し今日は較見るに足るべきものと爲つたのである

第一部 農業科商業科各二ケ年

高等科卒業程度のもを入學せしむ

第二部 尋常科卒業以上のもを入學せしめ學年は五ケ年にし

て主として冬期に日曜日を除き毎夜夜間教授を爲す

研究科 第一、二部卒業より丁年に至る迄主として冬期夜間教授を爲す

校舎の建築

大正七年度に職員室一教室四其他廊下便所玄關等を建築し工費八千四百餘圓を支出す大正九年度に於て教室講堂其他宿直室使丁室等延百三十六坪餘の建築工事を施工し工費二萬餘圓を支出す本校の豫定工事は之を以て完成を告げたものである九年度工事の一部は都合によりて十年度に繰越したる爲め同年十月を以て完成し十月十三日落成式を舉行せり

經費

一大正十一年度經常費豫算

赤穂女子實業學校

本校は明治三十五年七月二十一日赤穂染織學校を創立せるに始り

大正二年四月一日學則を改正して女子實業學校と改稱し後又大正六年學則を改正し同年七月九日文部大臣の認可を得其後又學則の一部を改正し漸次其内容の充實を見るに至れり

第一部 本科二ヶ年補習科一ヶ年

第二部 高等科卒業程度のもを入學せしむ

教授を爲す

校舎の建築

大正六年度に於て工費金一萬七百餘圓を支出し校舎を建築し同年十二月十六日落成式を舉行せり

大正十一年度經常費豫算

七、二四〇、〇〇

教育基金

教育基金は教育に關する特別事業費を支辨するを目的として金十萬圓の蓄積を豫定し大正十年四月縣知事の許可を得てその蓄積に着手したるものであるこの基金に依りて支辨する事業の支途は左の通りである

- 一、育英費
- 一、國民教育獎勵費
- 一、教育に關する研究費
- 一、講習會及講演會費
- 一、圖書館費

基金の現在高は二千二百三十七圓四十五錢である

町村道の十二間と

町村道の管理は大正八年二月里道管理規則を制定しまして樞要のものは村の直轄として其他は道路保護組合に其管理を委託して營繕掃除雪掻等を施行することに定めましたが大正八年四月道路法の發布

により更に管理方法を制定せなくてはならぬ様になりましたから只今は其審議中であります道路法の規程によりて町村道と認定して郡長の認可を受け公用開始の旨を告示せる町村道は

延長九十四里二十四町五十四間

でありまして其内樞要路線の延長は十六里三十町三十七間ありますこの外村内にある郡道の延長が二十九町四十五間縣道の延長が一里十六町二十二間あります産業と文化の發達上この樞要路線十六里餘を改修する事が今後の本村の問題として研究されて居ることである

○消防組のこと

本村消防組は明治二十七年二月勅令第十五號を以て消防組規則の發布と共に組織せるもので創立當時の組頭は鹽澤太一郎氏が任命されました現在組員の定員は六百一名で其功勞事績は左の通りである

赤穂消防組

金馬簾一條認許

- 明治二十九年十月三日
- 同 三十年一月二十六日
- 同 三十一年十月十三日
- 同 三十二年五月廿五日
- 同 三十六年八月十日
- 同 四十一年四月十一日
- 同 四十一年五月五日
- 大正三年十月二十七日
- 同 四年七月二十九日
- 同 六年十二月七日
- 同 八年七月十七日
- 同 八年十月十一日
- 同 九年五月二十日
- 同 九年十月十七日

同上

同上

同上

同上

同上

同上

同上并ニ証明書下附

金馬簾一條認許

同上

同上

同上

同上

長野聯合消防同盟會より授章を贈らる

同 十一年三月二十三日

金馬廉一條認許

同 十二年五月一日

証明書下附

經費

大正十一年度經常費豫算

一、九三六、〇〇

○公共團體のこと

下平水害豫防組合 は村内天龍川太田切川田澤川宮澤川等の水害を防禦し又之等河川による灌漑水利の改善を目的とし大正六年十二月其設立を申請し大正七年八月創立委員長として本村長を知事より指名され大正八年二月關係者の總會を開き規約を決議し同年八月二十五日組合會議員の選舉を行ひ成立を告げたものである

赤穂村興風會 は明治四十二年大陰曆日を曆中より除きたるときに創まる村政の研究と弊習の矯正とを目的とし總會は毎年一月一日

拜賀式の後に開かるゝを例とする

綱領

大正元年十月三日制定

- 一、國家の秩序を尊重し世運の進歩に伴ひ修身齊家の道を竭すこと
 - 一、公共事業の經營を適切にし自治の完成に努むること
 - 一、學校教育並に社會教育の進歩普及を圖り其効果を擧ぐるに努むること
 - 一、産業の改善發達を圖り富力の充實に努むること
 - 一、社會習慣の改良を圖り民風の振興に努むること
- 右綱領の主旨に依りて別に興風規定と稱する細目の規定が定められてある

赤穂村農會 本村農會の前半身は明治二十一年實業研究會の設立に創まり同會は明治二十四年赤穂農談會と改稱し明治二十九年縣令を以て農會準則の發布せらるゝや同會の支會を基礎として村農會を組織し明治三十年九月其筋の認可を受け次で明治三十二年農會令の發布により會則を改正し組織を變更し明治三十三年六月繼續

認可を経たのである爾來事業の施設に努め明治四十三年三月本縣農會より表彰せられたり

赤穂商工會 は明治三十四年に創立されたのであるが不幸にして會務不振の状態にありしに時勢の變遷は商工業者を奮起せしめ大正五年八月六日總會を開き組織を改めて復活の途を講じ爾來事業の施設に力を輸し商工業の代表機關として漸次活動の域に向ひつゝあり

産業組合 は本村に左の五組合を有し何れも設立の目的を達し活動して居る大正十年度の現況は左の如し

有限責任赤穂信用組合

設立	明治四十四年
組合員數	五九一
出資口數	一、一〇〇
出資拂込高	二一、九〇〇圓

準備金積立金	三、四四二圓
組合員貯金	九二、五五三圓

有限責任宮前信用購買組合

設立	明治四十五年
組合員數	三五
出資口數	一三三
出資拂込高	一、三三〇圓
準備金積立金	四六四圓
組合員貯金	三、九〇七圓

有限責任伊那生絲販賣組合聯合會龍水社

設立	大正三年
組合員數	二二
出資口數	一三一圓
出資拂込高	二八、一〇二圓
準備金積立金	四三、七八九圓

有限責任赤穂生絲信用販賣組合一力社

設立	大正四年
組合員數	四九一
出資口數	一、〇二〇
出資拂込高	三〇、三二八圓
準備金積立金	二、五二九圓
組合員貯金	四五、〇五三圓

保証責任赤穂信用販賣組合共信社

設立	大正四年
組合員數	六八九
出資口數	一、三〇九
出資拂込高	三五、一四五圓
準備金積立金	四、二五六圓
組合員貯金	五三、二六七圓

(この組合は農業倉庫を兼營して居る)

赤穂青年會 本村の青年會は上穂町小町屋市場割上赤須下平の六團體に分れて各獨立せしが大正二年一月聯合して赤穂村聯合青年會

を組織し大正十年二月二十七日各團體を解散して赤穂青年會といふ統一團體となつた

赤穂村尙武會 は明治二十六年十一月の創立に係り兵役優待のことに努めつゝあり明治卅七八年役後戦病死者の爲めに共樂園に忠魂碑を建設し又大正五年五月軍人待遇法を改定して其優遇に務めて居らるゝのである

帝國在郷軍人會赤穂村分會 明治二十七八年戦役の後凱旋軍人によりて赤穂軍友會なるもの組織され明治三十一年二月組織を改めて赤穂軍人團と改稱し明治四十三年十一月三日帝國在郷軍人會の設立せらるゝや其宣言及規約に従ひて帝國在郷軍人會赤穂分會に組織を改むることに決し明治四十四年一月一日創立總會を開き規約を定め役員を選擧し同年二月十一日發會式を舉行せり

納稅組合 は明治四十五年四月納稅組合表彰規程の制定に基き組織

せるもので現今組合数は三十一組外に月税納税組合あり納税戸數二千四百七十六戸の内二千百六十戸は組合員である創立以來各組合共に滞納者なく何れも指定の納期日に全部完納するの良成績を示して居る

衛生組合の創立以前にありては各區に衛生委員あり専ら保健のことに従事せしが明治四十一年十二月縣令を以て衛生組合に關する規定の發布せらるゝやこれに基きて明治四十二年四月各區に衛生組合を組織し聯合衛生組合長以下役員を選擧し現今九十一組合あり其小組合を聯合して赤穂村聯合衛生組合があるのである

○村有財産のこと(大正十年十二月末日現在)

一、基本財産并に積立金

種目	金		有價証券	土地價格
	現金	村費繰入額		
村基本財産	一、二七〇	三、四、六五二、一九	三、八七〇、〇〇	一、四五、一九六、〇〇
小學校基本財産	六三、八五	四、七〇〇、〇〇	五、八一〇、〇〇	一、七〇一、〇〇
赤穂公民 實業學校 赤穂女子 實業學校 基本財産	二二、二五	二、一〇〇、〇〇		
林野經營基金	三、一〇〇	二、一〇〇、〇〇		
里道營繕基金	二〇〇、〇〇	一〇、一〇〇、〇〇	四、七〇〇、〇〇	
里道營繕準備積立金	五七、二七四	一〇、〇〇〇、〇〇	一、八〇〇、〇〇	
教育基金	八二、四五		四〇〇、〇〇	
合計	一、八四、九七	六三、六五一、一九	一六、五八〇、〇〇	一、四六、八九七、〇〇

二、土地

地目	村基本財産	小學校基本財産	普通財産
田畑山林	町 一、〇六四	町 一、八二九	
山	一、四八九、一五〇〇		
原野	二六六、二〇一五		
溜池	一、六二九		
其他			九、四五〇

三、建物	数量	坪
役場	建	六十三坪三合三勺
小學校	建	千四百四十四坪四合五勺五
公民實業學校	建	百三十二坪一合六勺
女子實業學校	建	百六十二坪五合

教員住宅	傳染病院	合計
建坪	建坪	建坪
四百七坪七合九勺	百八十七坪	二千六百十二坪五合三勺七

○産業

(大正十年)

本村主なる生産物の數量及價格は左の如し

種類	數量	價格	種類	數量	價格
米	一四、三五〇石	五二、四七二円	竹製品		一一、〇六八円
麥	一、〇八一	一三、二五七	木製品		四、一六〇
生繭	六〇、三五五	四八、九九三	林産物		一九、六〇〇
食用農産物		三六、四七〇	石材		二七、〇〇〇
園藝農産物		二九、九五〇	清酒	一、五七四石	一七三、一四〇

桑苗	六、七八	醬油	一七二〇石	三六、〇〇〇
養鯉	二六、八五〇	氷豆腐		三二、二五〇
養鶏	三、〇〇〇	生糸	一〇、四六五	一〇、三〇〇、六二五
養豚	一、三五〇	染物織物		三三、二〇〇
藻製品	一四、五四〇	計		二、五六二、六四三

明治二十二年以來本村主要農産物の發達趨勢を示せば左の如くである
 本村は今後尙耕地五百町歩を開拓するの餘地を有し尙耕地整理並に灌漑水路の整理を遂ぐれば土地の利用を増進し得べきものは甚大である

年次	米		養繭		價格
	作付反別	收穫高	收繭高	價	
明治二二	五、五六三	一〇、三三六	四、五三二		三、六八六

○有租地

大正一〇	三七、七	一四、三五〇	六〇、三五五	四八一、九九三
四二	六〇、三	一〇、三七九	二九、四〇三	一一九、六〇〇
三二	五七、九、五	一〇、二五〇	二〇、九八四	九八、四五六

地目	大正十一年一月一日現在		明治二十二年一月一日現在	
	反別	地價	反別	地價
田畑	九四三、二三三	二三〇、四二九、七一	五七三、二三〇	二二二、〇〇八、七六
宅地	三九二、一〇二、七	二四、七五二、〇〇	四五六、七三〇	二六、二四七、五八
山林	二、三六、九五四 ^坪	九八、〇〇五、七三	一八〇、二九五 ^坪	一五、三四三、九一
山地	一、六二七、九七〇	一、八二二、七七	二、〇五三、九〇三	二、二〇八、二八
原野	一、四三三、四三四	二、六三三、四八	一、五六八、六二八	三、五六一、三四
計	四、四五五、七三八	三五七、六二二、六九	四、七二四、六三六	二、五九、三六九、八七

大正十年度

○國縣稅

直接國稅

地業租

營業稅

所得稅

賣藥營業稅

計

一四、一四三、七一
八、六四三、二〇
一五、一二三、〇一
四六、〇〇
三七、九五五、九二

縣稅

地租附加稅

戶數割

營業稅

雜種稅

國稅營業稅附加稅

一七、〇三六、五三
一四、〇六二、二七
四、八四二、五七
一六、八五六、五五
四、〇六七、五一

九八三、二〇

一、三八

五七、八五〇、〇一

所得稅附加稅
賣藥營業稅附加稅
計

○明治二十二年以降戶口

十二月末現在

年次	戶數	人口
明治二二	一、二七三	六、六九五
二	一、二五八	七、一七四
三	一、三九六	七、七〇八
三	一、五〇八	七、八二〇
四	一、五八三	一〇、二四七
元	一、六七五	一〇、七〇九
一	一、八一	一一、六一四
一	二、四二四	一二、七一

備考 明治七年戶籍編成の時は戶數九四一戶人口九百九十八人なり

○明治二十二年以降小學校兒童數 三月末現在

年次	尋常科		高等科		合計
	男	女	男	女	
明治二二	三三九	九七	五三	四	四九三
二五	三五二	一五六	一三七	一六	六六一
三〇	四一八	三三二	一四七	四〇	一八七
三五	四二四	三六四	一五四	五九	二二三
四〇	四三二	四〇八	一八四	五五	二三九
四五	七〇八	六三八	九七	二七	一三四
元	八〇二	七六七	一三三	四〇	一七一
大正	九二二	九〇〇	一九六	九六	二九二
一〇					二、二〇四

備考 明治四十一年より尋常科六ヶ年に延長セリ

○明治二十二年度以降歳入出決算

(圓位未満省略)

年度	歳入		歳出		備考
	村税	税外收入	經常部	臨時部	
明治二二	一、五八九	六四九	一、八九三		
二三	二、〇三八	四五一	二、二一〇		
二四	一、九九四	五二五	二、三九九		
二五	二、五七一	一、三八七	三、六八三		小學校増築ノタメ
二六	二、七二六	二、三三三	三、二二五	一、六八〇	起債額九二六圓
二七	三、八九二	一、三〇九	四、八八一	三五〇	
二八	三、七四八	一、八四四	五、一四二	四四八	
二九	五、四五四	八、七四〇	六、二六五	六、八七四	小學校改築ノタメ
三〇	七、六九七	七、五七〇	九、五二四	五、六八四	起債額四六二五圓
三一	一、一〇三二	六、〇一五	一、三、四〇四	二、九〇四	小學校改築及傳染病院建築ノタメ起債額二七九〇圓

三	一三、〇六七	三、二二一	一六、二七九	九、四〇一	三、九五〇	一三、三五二
三三	一三、八〇六	五、四五六	一九、二六三	一〇、九二〇	六、七七二	一七、六九二
三四	一二、六九六	五、四〇五	一八、一〇一	一一、四六四	三、〇八四	一四、五四九
三五	一二、〇八六	五、八四七	一七、九三三	一二、三二一	二、八七八	一五、一九〇
三六	一一、〇六六	四、八七七	一七、九四四	一三、九〇九	一、八九〇	一五、八〇〇
三七	七、九九九	三、七四五	一一、七二五	九、三五六	四、六	九、七八三
三八	九、二八〇	四、一一三	一三、三九四	一〇、〇五六	七、七九	一〇、七六五
三九	九、二二二	四、九五三	一四、〇七五	一〇、七六〇	七、八一	一一、五四一
四〇	一五、九四三	五、〇二八	二〇、九七二	一三、八〇一	三、七二二	一七、五二三
四一	三三、二四四	一六、〇五一	四八、二九六	一六、九九〇	二五、四四四	四二、四五三
四二	三三、二八一	一一、〇三七	四三、三八	一八、六九一	二二、六二七	四〇、三二八
四三	二五、〇〇八	九、一一五	三四、二四	一九、四〇七	三、一八〇	三三、五八八
四四	二八、五四六	四、三三一	三二、八七八	二二、〇五六	七、七七四	二八、八三〇

村債償還完了
 小學校々地擴張
 小學校増築ノタメ起債額六〇〇〇圓
 小學校増築
 小學校々地擴張
 小學校々地擴張
 小學校増築ノタメ起債額六〇〇〇圓
 小學校増築
 小學校増築及女子
 實業學校新築
 村落有財産整理ニ伴フ寄附受入額四二一〇圓本財産積額四〇三五圓小學校及公民實業學校増築
 教員其他有給吏員臨時手當支給

四五	二八、九五二	一九、五二九	三六、四八二	二三、四二四	一一、七三二	三五、一五七
大正元	二七、五〇三	八、〇七六	三五、五七九	二三、四二九	五、八九一	二九、三二一
二	二二、七三二	一〇、三三三	三三、〇六四	二五、三八一	六、三七六	三二、七五七
三	二五、六八九	六、〇六〇	三二、七五〇	二四、四三六	四、三四九	二八、七八五
四	二七、一九三	一五、六六〇	四一、八五四	三三、八七七	二四、六二二	三八、四九〇
五	二九、五八五	二二、二二八	五一、七三三	二五、六三八	三三、六一一	四八、二四九
六	三六、八四二	六三、二一五	九九、九五六	七五、一四六	二〇、八〇三	九五、九四九
七	七四、八〇二	一三、六九九	八八、五〇一	五五、四八四	二〇、三二二	七五、七〇六
八						

里道小銀泊線改修
 傳染病大ニ發生ス
 小學校々地擴張ノ爲メ基本財産繰入額八〇〇〇圓
 小學校増築及女子實業學校新築
 村落有財産整理ニ伴フ寄附受入額四二一〇圓本財産積額四〇三五圓小學校及公民實業學校増築
 教員其他有給吏員臨時手當支給



大正十一年十二月一日印刷
 大正十一年十二月三日發行

編輯兼發行所

赤穂村役場

右代表者

赤穂村助役
 氣賀澤勝一

印刷者

上伊那郡赤穂村九二四
 田中大弼

印刷所

東京市神田區五軒町十四番地
 泰雲堂印刷所

九	九八、八〇三	一二、四九六	二二〇、三〇〇	九二、六一	九五、四〇二	一八六、六六三	小學校増築並公民 實業學校及役場廳 舎新築ノタメ起債 額四五〇〇圓
一〇	一三三、八八九	七三、三六二	二〇五、二五二	一〇四、九九八	六四、二〇〇	一六九、一〇八	其本財産繰入額四 五五三四圓
一二	一四〇、三五六	五二、八四二	一九三、一九八	二二八、二四四	六四、九五四	一九三、一九八	小學校増築役場並 ニ登記所廳舎修築 及警察分署工事費 寄附等アリ
備考	十一年度ハ既決豫算額ナリ						役場廳舎建築工事 完了奉安殿建築

終

